

## ジョン・ダウランドの作品

ジョン・ダウランドは16世紀末から17世紀初頭にかけて活躍したリュート奏者兼作曲家。彼の音楽は当時、英国で流行していた「メランコリー（憂鬱）」の美学を極め、「常にダウランド、常に悲し（Semper Dowland, semper dolens）」という題名の曲も残している。本日は、彼の4つの曲集を通してその変遷を辿る。

1597年出版の《歌曲集 第1巻》（The First Booke of Songes, 1597）は、ダウランドの名を知らしめたベストセラー。「甘い愛が誘っている（Come away, come sweet love）」は、恋人たちへの甘美な招待状のような一曲。軽快なリズムと親しみやすいメロディは、ルネサンス期の「愛の喜び」を表現している。「彼女はいいわけできるのか（Can she excuse my wrongs）」は、ダウランドの代表作の一つ。リズミカルで切迫感のある旋律が、求愛を拒絶された男の苛立ちと情熱を描いている。この曲は、エリザベス女王の寵愛を失いかけたエセックス伯ロバート・デヴァルの心情を代弁しているとも噂された。「彼の金髪を（His golden locks time hath to silver turned）」は、女王の忠実な騎士であったヘンリー・リー卿の引退式のために書かれたとされる。「かつての金髪も、時とともに銀髪（白髪）へと変わる」と、自らの老いと引退を寂しくも誇り高く歌い上げる。

ちょうど世紀の変わり目に出版された《歌曲集 第2巻》（The Second Booke of Songes, 1600）では、ダウランドの「涙」と「嘆き」の表現が深化している。「悲しみよ とどまれ（Sorrow, stay）」は、劇的な構成が光る傑作。前半の沈み込むような嘆きから、後半の畳み掛けるような調子への変化は、まるでオペラのワンシーンを見ているかのよう。「流れよ わが涙（Flow, my tears）」は、ダウランドの代名詞とも言える、時代を超越した名曲。器楽曲「ラクリメ（涙）」としても知られるこの旋律は、下降する4つの音（涙のモチーフ）から始まり、深い悲哀の淵へと聴き手を誘う。当時のヨーロッパでも大流行し、「涙のダウランド」のイメージを決定づけた。

《歌曲集 第3巻》（The Third and Last Booke of Songes, 1603）は、円熟期を迎えたダウランドの洗練された旋律美が際立っている。「時が立ち止まり（Time stands still）」は、恋人の美しさを前に、時さえも動きを止めるという至福の瞬間を讃える。ゆったりとしたテンポのなか、永遠に続くかのような愛の静寂が広がる。「愚かな蜜蜂が（It was a time when silly bees could speak）」は、「その昔、愚かな蜜蜂たちが言葉を話せた頃」というユニークな歌詞を持つ曲。巣箱に入れてもらえない蜂の姿を通して、宮廷での出世が叶わない自身の境遇が歌われている、と推察される。

「シェイクスピア：ソネット 第8番」は、音楽の比喩を用いて、独身でいる若い男性に結婚と子孫繁栄を促す作品。詩人はここで、調和のとれた音楽のように、家族という「和音」を築くことの重要性を述べている。伝統的なシェイクスピア形式（3つの四行連と1つの二行連）にしたがって、音楽の描写から始まり、結婚という「調和」への移行を説き、最終行の二行連で「独りでいては何者にもなれない」と諭し、結合（結婚）こそが充実した人生をもたらすと主張する。

ダウランド最後の歌曲集《歌曲集 巡礼の慰め》（A Pilgrimes Solace, 1612）では、和声がより複雑になり、歌詞も思索的な深みを増している。「言葉で訴えようか（Shall I strive with words to move?）」は、言葉で心を動かすべきか、それとも沈黙を守るべきか……叶わぬ愛に対する葛藤が高度な和声を伴って吐露される。「時よしばらく立ち止まれ（Stay, Time, awhile thy flying）」は、過ぎ去る時への切実な呼びかけ。愛の喜びを留めておきたいという思いが表現される。「この震える影の中で（In this trembling shadow cast）」では、光と影、現世と来世の狭間で揺れ動く魂が歌われる。

／他